一青年の日記

――「諏訪部日記」のこと――

中西健治

はじめに

長野県立青年学校教員養成所（現、信州大学教育学部）に学んでいた諏訪部吉次郎という一青年の昭和十五（一九四〇）年の一年間を綴った博文館の日記（以下、本書という）について報告する。本書は、当時、四十種類を超えたと言われる博文館刊行の日記の一つで、表表紙の裏面に「長野県全図」、裏表紙の裏面に「中支南支方面要図」と「揚子江流域地方」の地図が彩色で掲載され、随所に実用的知識を掲載した長野県版の日記である。巻末に三十数頁の長野県に関する「当用大鑑」もあって当時の長野県の概要をも知ることができる。ちなみにその中の「教育」の項に記された「学校」のうち、「青年学校教員養成所」については、「学校数一、教員数十六、生徒数四十」と記されている。本書は偶然に入手したものであるが、丁寧なペン字で克明に記された記事を辿っていくと、一九四〇年代の、いわば日本にとって激動期とも言える時代を真摯に生きようとしている青年の姿が鮮やかに浮かび上がってくるのである。同時に稿者にとっては一世代前の史的事象を漠然と把握していたことが虚飾無く立ち上がり迫って来るようにも思われ、その記述に圧倒され次第に名状し難い魅力を覚えたのである。たとえ一部なりとも伝えたいとの思いが次第に抑え難くなってきた。本報告に至った端緒である。なお、諏訪部吉次郎氏は平成六年十二月に亡くなっているが、ご遺族に了承を得たうえでの執筆であることを最初に御断りをしておく。

一　諏訪部吉次郎という人物

諏訪部吉次郎なる人物はおよそ時代の申し子とも言うべき青年であり、「皇国日本」の典型的な一青年であった。きわめて勤勉で几帳面な性格であったことが、本書に刻まれた石肩上がりのやや小さめに綴られたペン字から滲み出していると思える。元旦、村の小学校で四方拝式があるのに遅刻者がいて時間がきても始ま

らず騒々しいことに対して、「全く不愉快である」と記していること一つを取り上げても明らかであろう。自己の内面を正直に告白しようとしている記事、「夜は疲れて本を読む気になれない。併しつまらぬ性欲を起こされるやうな小説は読みたいやうな気がするのは癪だ。『女の一生』を少しひろげて見る。このやうな後は必ず悔いられる。いけぬものだ」（一月三日）とか、森田草平の「煤煙」について、「読んで十二時過になる。ふしだらなところへ来て興がなくなって止める」（一月六日）とか、軍人勅諭の暗誦がはかどらないことに「雑念が入って駄目だ」「休みが嫌になった」（一月九日）と自己抑制や反省の記事もある。また一月十日には「トルストイ十二講」を拾い読み、その人間性に共感を覚えると記し、学校の図書館で開かれたドイツヒットラーユーゲントの一団員の講演や映画に触れて「激烈な愛国心」に刺戟され「我等大いに範とすべきなり」（一月二十日）と記している。寒稽古納会に際しての校長訓示に「一層国のために体力向上に精励せねばならぬ」（一月二十三日）とも自戒する記述から模範的な学生像が垣間見えよう。校内での弁論大会があり、クラス代表として「明日の青年教育者へ」と題する発表をしたり（二月四日）、翌日は朝から蟄居してペスタロッチの「隠者の夕暮」を読んだりしている。さらに二月五日の記事には養成所進学希望を取りやめた某君のことに関連して、「今年の教育志望者はよく〳〵ないであらう。併し、教育を今程重要に思はれる時はない」と信念を吐露してもいるのである。「午後、靴屋へ行く途中、配属将校の服部先生と同じ電車に乗り合わす。官侯の話などを聞き、教員等より兵隊になるほうがよいために、養成所の卒業生には配属将侯になる者が多いと話される。併し自分は兵隊が嫌いではないが、青年の教育をどこまでもやって見たい」（二月十日）という記事から本人の志の程を知ることが出来よう。吉次郎が学んだ青年学校教員養成所とは、大正七年（一九一八）設立の長野県実業補習学校教員養成所を源とし、本書が記されている五年前に今の名称になっている教員養成を主目的とする学校である。吉次郎は本校に入る前、すなわち昭和十三年（一九三八）一月から約一年間地元の小学校の代用教員を経験し、その後、翌十四年（一九三九）に本校へ入学している。しかし時代は軍事色の濃厚な時期であるために、軍人志望の者が多かったのである。本書には一年の出来ごとすべてが均等に記入されているのでは勿論なく、加えて相当に長い空白の期間もある。五月三日から五月二十二日まで、八月二十六日から九月三日、九月十四日から十一月二日まで、さらに十一月十三日から年末までの五箇所が全くの白紙で、なんらかの事情があったものかと思われる。しかしこれ以外の日々については、ときに欄外にも及ぶ詳細な記入がなされていたり、欄外に設けられている天候や予備、信書の記事にもきちんと相当する記入がなされている。本書でとりわけ注目される記事は二つで、一つは満州勤労報国隊として満州に派遣されている間の記録、もう一つは皇紀二千六百年記念奉祝大会に参加した記事である。いずれも社会的に大きな出来事に関わっていて、これに関連する研究や

報告は多く、詳細についても判明しているが、大きな時代の渦に呑まれながら一青年がどのように自己を見つめたのかを知ることは意義あるものと言えよう。

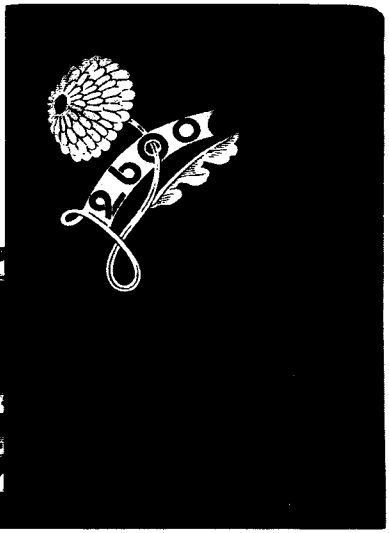
二　満州勤労報国隊への参加

正式には「満州建設勤労奉仕隊」と称し、日本政府がときの文部省・拓務省を主務官庁として昭和十四年（一九三九）から昭和二十年（一九四五）まで編成された組織である。時に組織の様相は変動したが、根幹は満州への移民、日本国と満州国の連合を図る具体的な事業の一つであった。組織は農村青年を一年間奉仕させる甲種と、学生を対象とする乙種があったが、実質的には一般開拓団と同様なものと捉えられていたという。本書には、前年に計画された事業として早速に生徒を募ったことが記されていることから、本校が当時の国策にきわめて迅速かつ従順に応じたことかと思われるのである。そこでまず、本書の記事に従って時系列的に行動を箇条書きにして示せば次の通りである。

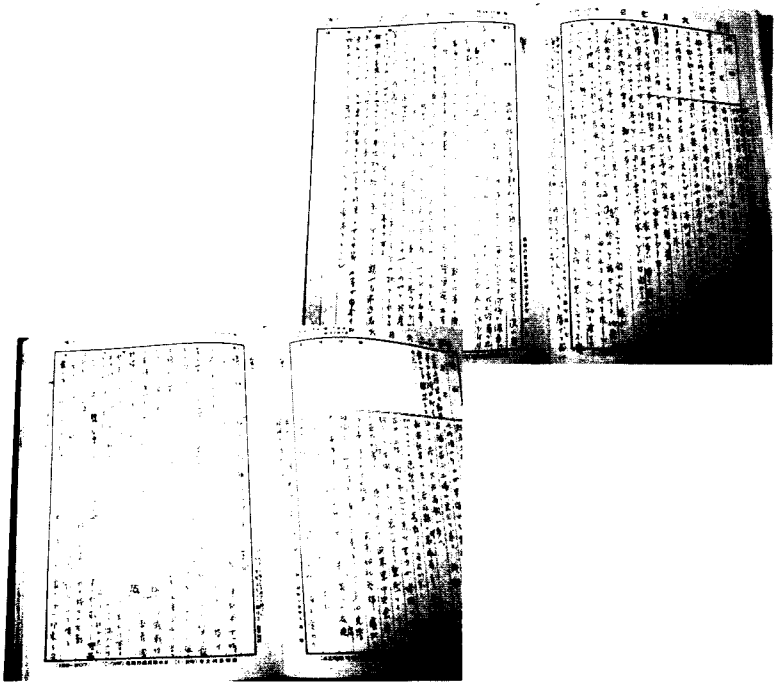
四月二十七日……身体検査。
五月二十三日……勤労報国隊への壮行会→午後、県庁へ→城山館集合→午後十時五十七分長野駅発（富山の奉仕隊と合流）
五月二十四日……高崎→上野着（午前五時二十分）→上野公園へ→常磐線で赤塚へ。
五月二十五日……雨天のため軍歌練習や座談会。夜、不寝番十時～十一時。
五月二十六日……合同礼拝所にて入所式。以後、六月二日まで河和田で猛訓練。
五月二十七日……奉仕隊の宣誓式。義勇軍の壮行会見学。
五月二十九日……水戸・常盤神社参拝。偕楽園にも行く。
六月　二日……午後一時十六分、赤塚駅発、上野へ。東京駅下車後、宮城遙拝。その後、市内行進。午後八時五十五分、東京駅発。
六月　三日……名古屋→琵琶湖→京都→大阪→神戸・三の宮下車、午前八時十五分。港へ。午前十二時、「海ゆかば」を合唱しつつ出帆。
六月　四日……午前六時半、門司着。上陸し、清滝公園に登る。夜、出帆。
六月　五日……玄界灘を越え、島影を眺める。
六月　六日……大連に上陸。関東軍中央倉庫を宿舎とする。関東神社参拝。
六月　七日……午前十一時、大連発、旅順へ。旅順市中見物。白玉山、招魂社参拝。
六月　八日……遼陽にて朝食。午前九時半、奉天着。市中見物。午後七時五分、新京着。再び汽車にて移動。
六月　九日……午前十時二十九分、ハルピン駅到着。船に乗り、

吉次郎二年生の冬

（『自分史　母の雪袴』巻頭の写真）
＊中央の軍服姿が諏訪部吉次郎



「諏訪部日記」（博文館日記の表紙）



「諏訪部日記」（6月4日～7日・旅順の招魂社の朱印が注目される）

六月　十日……午後五時頃、太古洞に到着。歓迎式後、河東に徒歩にて移動。
六月　十二日……奉仕隊としての活動開始。園芸方面の手伝いなど。
六月　十三日……雨天。体調不良。以後、十六日まで。
六月　十九日……復調。開墾地の整地。野菜の定植。健康の嬉しさ、働ける幸福を感じる。「外に出て見ると恰度満月。よしきりが盛んに鳴いて居る」とも。
六月　二十日……五部落へ行き、作業。（二十二日まで）
六月二十三日……清河鎮への遠足。小学校にて村長、巡査の講話。
六月二十四日……作業。
六月二十五日……雨天につき作業なし。
六月二十六日……馬鈴薯畑の除草作業。（二十七日～二十九日も同様）
六月　三十日……第一部落での作業終了。
七月　一日……以後、一週間、河東にて作業。（四日より体調不良。六日～十一日も休む）
七月　十六日……体調戻り、作業。（以後、種々の作業あり。略。）
八月　十六日……夜、日満青年懇談会。日本側の代表となる→現地人の日本人に対する感想を聞く。
八月　十七日……船で清河鎮へ移動。
八月　十八日……予定変更につき出発の準備に追われる。
八月　十九日……午前中は帰り支度をし、午後、河東を去る。
八月　二十日……午後、通河に着き、農事試験場にて一泊。
八月二十二日……ハルピン駅に移動。市内の店にてロシヤ飴を買う。
八月二十三日……市内見学。夜十一時二十分、ハルピンを発つ。
八月二十四日……朝、新京着。満鉄広場にて解散式（長野・岐阜・奈良・岩手各県の四隊）。夜、新京を発つ。汽車にて図們へ。日本への帰心起こる。

諏訪部吉次郎は満州開拓への奉仕作業遂行の気持ちを強く持ち、責任ある役目を担っていたことも手伝って、現地での日々の作業の詳細が記されているものの、なかには心情や感想を挿入している箇所もある。いまそれらを列挙しておこう。

○「見送りに来ている人達に対して挙手の礼をなし、海ゆかばを合唱、石田諏訪部両先生の顔を見ながら海ゆかばを歌って居ると思はず涙が出て来る」（六月三日）
○「市街に出れば思ったより整然としてアカシヤの並木が初夏らしい感を与へる」（六月六日・大連にて）
○「我が将士の苦戦、案内人の説明に一同魂をうばはれる。記念に小石二粒を拾ひ山を降る。大陸へ上陸早々の此の戦蹟廻りは我等奉仕隊には全く強き第一印象を与へた」

（六月七日・旅順見学）＊

○「満人市街を通って松花江の埠頭に着く。満人の男女がぽかーんとして大勢河を見つめて居る。全く亡国の民だと云ふ感じがする」（六月九日・ハルピン）

○「開拓団へ来てから最初の日曜日なり。（中略）自分も元気であったならば行かれるものを、風邪等にとつかれて全くしゃくに触る」（六月十六日）

○「今日から愈々外へ出て仕事が出来る。朝礼に地下足袋をはき出すのも一週間ぶりだ。少しくらい嫌なことでも健康な事なれば嬉しい」（六月十九日）

○「満人小学校へ行って満人の村長の話を聞く。その前に木野さんと云ふ巡査さんより此の辺一帯の歴史を聞く。匪賊の話等をしばらく話される。大変解った人で、特に満人に対して彼等の権位を認めてやらねばならないと。移民団には殊にると満人を軽蔑するやうな態度をとるがこれは特に注意せねばならぬことであると。その他民情風俗等に就いても色々参考になる事を聞く」（六月二十三日）

○「部落の一奥さんの『どなたもお起きなんしょ』と云ふのによって明ける。全く感じが良い。河東の奥さん方のやうに何時も他人顔をして居って『わしやゆううつ』等と云って居るのとは格段の差だ」（六月二十四日）

○「たまには自分を反省するもよい。己は教員養成所の生徒たる行動を何時もとって居るだらうかと云ふ事だ。青年学校の生徒も幾人も居る。自分は何時もそれらの生徒より言行共に卓越し、彼等をリードせねばならぬのだ」（七月九日）

以下、現地での作業内容などについてはまだまだ多くの記事があげられる。しかしこれ以上の引用は紙幅を考慮して慎みたいのだが、なおこの機を利していくつかの付記したいことがある。それは一つに、時に比較文明論に類するような記述が見られることである。八月十六日の夜、現地の青年団との懇談会が開かれ、現地の人が示した日本人への観察を次のようにメモしていることがそれである。これは日記の上欄に摘記されている。

忠君愛国の精神強い。実務に誠実である。衛生観念強い。下駄が衛生的で経済的である。日本の男は酒に酔ふと醜態を晒す。ふんどしをしたままで裸で道を歩く（満州婦人が笑ふ）。日本服は無駄が多い。眼鏡使用者が多い。日本人の正座は衛生的か。日本婦人は内足で歩く。

日記である以上、抒情的な記事は捨象されているのは当然ではあるが、中には満州における作業の合間に周囲の光景に目をやり心を休める時もあったのか、まれに次のような風景描写の記事に触れ、内面吐露としての日記の一面を知ることができるのを第二点目にあげておきたいのである。

○「それより一里ばかりして河東に着く。辺りは一面草原で緩やかな高低をなし、西北の遠方に大木の茂る山が見える。今が恰度春だと云ふ。きんぽーげ、あつもりさう、筆りんだうのやうな草が春を（謳歌）して居る」　（六月十日）

○「夜は暑くて寝苦しい。誰も中々寝付かれない。外に出て見ると恰度満月。よしきりが盛んに鳴いて居る」　（六月十九日）

○「日之出が遅くなったのか午前五時の起床は大変早い位になった。暑くて寝苦しかった夜も何時しか涼しくなって来て朝の起きがけ等は寒い位だ。C十度だ。窓のガラスには水蒸気がいっぱいついて居る。太古洞河の上にはずーっと朝霧が張って居る」　（八月七日）

また、八月七日は旧暦の七夕である。本部の軒先にある柳の枝に短冊を飾ってあるのを目にした吉次郎は「楊柳に短冊ひらめく移民村」の一句を一行を用いて書きつけている。日記中唯一の詩である。さらに、八月二十四日、新京での解散式を終えた後、夜十時五分にそこを発つ。一路、日本へという二十五日の記事の上欄に珍しくペンで描かれた絵がある。二つの山並みの一方に「張鼓峯」と記す。「父は絵を描くことが趣味であった」とご子息から伺った。しかし、日記中に描かれたのは、この一箇所のみである。もっと多くの絵があってもよさそうに思われるのだが、奉仕作業時にあって、たとえ日記といえども絵を日記に記すことを抑制されたものかと推測するのみである。さればこそ、満州を離れるときに見た山並みはペンを日記に走らせずにはおかなかったのだろう。

＊ケネス・ルオフ氏著『紀元二千六百年　消費と観光のナショナリズム』（二〇一〇・一二・朝日新聞出版）によると、当時の日本人にとって満州は観光地としての側面もあったという。本書に記された旅順、大連、奉天、新京などはまさに観光ルートそのものであったのである。

三　皇紀二千六百年奉祝記念大会への出席

本書十一月六日の上欄に「朝礼の際に所長先生より二千六百年奉祝大会に代表として自分が出る事の発表がある」と記されている。「宮城外苑に天皇・皇后臨席のもと文武高官、外国使節をはじめ全国各地代表、さらには外国在住者総代など五万五千人の参列者を集めて式典が開かれた。翌十一日には、やはり宮城外苑で紀元二千六百年奉祝会主催の奉祝会が行われた」（『国史大辞典』四）とあるように、十一月十日、十一日両日に祝典が開かれ、吉次郎はこれらに出席をしている。この式典、大会の模様についてはさまざまな記録があるが、参加者の一青年がこの渦をどう受け止めたか、歴史の一事実として見ておきたい。

十一月九日の記事は、午前七時に校門を出て長野駅、軽井沢を経て上野駅に着き、日本青年館着までのことを記しているが、上

欄に長野県代表者を「引率者＝黒岩　茂、師範＝原田忠作、養成所＝諏訪部吉次郎、長工＝岸辺一夫、長野中＝小林剛夫、後町青＝松岡光平」と列記している。翌十日は祝典で、右の六名で明治神宮、靖国神社を参拝。上野の帝室博物館を見学し、午後、二重橋前の式場に向かった。三時に終了し、「大変疲れる」と締め括っている。翌十一日は奉祝大会で、右欄外に「二千六百年奉祝大会」と異例の記入をして、上欄には天皇や皇族の観察を細かい字で綴り、「我々民草は如何にして皇室の御恩に報いねばならぬのだらうか」と結んでいる。下段には大会の記録がこと細かに記されていて、吉次郎の観察眼の力に驚かされる。いまその一部を引用しておく。

ま新しい大きな殿御を前に五万の民草の並居る席がひかえて居る。両陛下の玉座を前に金屏風が厳かに見られる。玉座の左右に各宮様大臣方がつかれ、万場斉列終れば午後二時、鹵簿しづ〳〵として二重橋を出でられる。軍楽隊の君が代吹奏と共に両陛下は出御される。万場水を打ったが如き静けさなり。一同最敬礼、君が代斉唱、総裁宮代理高松宮の祝詞奏上。御声凛然として万場にひびき「有仁」とおほせらるには民草一同感きはまる。

このような記述を個人的な日記にまでも営々と記している精神的光景は、本書だけが持っているものではなく、おそらくは時代が多くの人々にもたらした空気であったろう。この日は冒頭に「朝から晩秋の空は雲一つなく澄んで恰も今日の佳日を寿ぐ如し」と書き始められているように、参加者一同の、あるいは多くの国民が等しく共有していた高揚する気持ちを代弁しているのかも知れない。十二日の夜に帰着して「なんと云っても間違ひもなく任を果たした事を嬉しく思ふ」と感想をとどめてもいるのである。先にも記したように、この日を境に記事は全く無い。吉次郎の自伝『自分史　母の雪袴』に「この歌はこの時の即興である」（一六六頁）として「任終えて碓氷トンネルぬけくれば初雪降りぬ故郷の山々」が記されていることから、あるいは日記とは別に心覚えのようなものが存在したのかも知れず、日々の記録もその方に移行したのではないかと思われる。

四　その他の記事とその後

本書には時々、上欄の「予記」の空欄に「阿部内閣解散」（一月十三日）、「本日、米内大将首相に任命さる」（同・十四日）、「米内内閣成立、静岡市の大火、五千戸焼失」（同・十五日）、「皇紀二千六百年紀元節拝賀式、今日の感激を忘るな」（二月十一日）などの時事に関する記事の他、「他人を見る前に先ず己を見よ、他人に干渉するな、人のことを言い過ぎるぞ、先ず独慎。」（二月十三日）、「過言。自抑自教」（三月十一日）などという教訓的な文言も記されている。五月二十七日以降、この上欄には日記欄以

外に満州義勇軍の行動についての記事もこまごまと記されることになる。また、附録の「金銭出納録」にわずかの記述があり、そこには「西洋哲学史」六十銭、「西洋史」一円四十銭、「徒然草解義」二円、「万葉集新講」二円五十銭などと購入品目と費用の記入があり、また、下駄、卵、菓子、はがき、はみがき粉、服ばけ、キャラメルなどの記入もあって、一青年の姿を彷彿とさせるものである。

ここまでは本書を読んでの心覚えとして書いていたものであった。これだけ克明に記された事実や固有名詞がある以上、それでは本書の本人もしくは縁者はいかなる人物だろうかということに次第に関心が移っていった。先年、長野県駒ケ根市中沢出身の国文学者で教育者であった宮下清計氏（『新註国文学叢書・浜松中納言物語』の著者）の研究姿勢や人物などを調べたこと（拙著『浜松中納言物語論考』所収「宮下清計氏の人となり」など）が契機となり、氏のご長男である宮下隆氏とはその後もいろいろ連絡を取り合っていた。そこでこの諏訪部吉次郎なる人物に心当たりはないかと尋ねてみた。もちろん確たる情報が得られることはあまり期待していなかったので、隆氏から、期待にそえないとの返信をいただいた時もさほど残念とは思わなかった。ところがしばらくして隆氏から、「長野市在住の姉から信州大学教育学部の古い卒業生名簿の中に西澤（諏訪部）吉次郎という名があり、住所などが判明したと知らせてくれた」との連絡をいただいた時は、正直言ってびっくりした。確実な情報が得られたのである。さっそく上田市の教育委員会の機関である信濃国分寺資料館に問い合わせた。ここの報告書（「創置の信濃国府跡／推定地確認調査概報Ⅱ」一九八四・三）の調査協力者の一人として西澤吉次郎という名前がネットにヒットしたからである。倉澤という館員が対応され、自分の兄の同級生で志摩晴樹という方が吉次郎氏の息子さんで、現在、長野県上田染谷丘高校の校長であると教えて下さった。ただちに長野県上田染谷丘高校に電話をし、校長と連絡がついた。日記のことを申し上げると、自分は二男で、父のことは長男の方がよく知っているのではないかと思う、そのような日記があるとは全く知らなかった、戦時中のことはよく父から聞いていたとのことなどなど、懐かしいとしきりに仰ってあれこれお話をしてくださった。すぐに兄上に連絡をとられたらしく、稿者の研究室に西澤省悟氏から連絡が入った。西澤氏はJTの副社長を経て、現在、その系列会社である日本フイルター工業株式会社の代表取締役社長をなさっている。昭和十五年当時に宮中での奉祝記念大会に出席したこと、そのときに下賜された箱入りの歌集（「列聖珠藻」）のことなどを父はよく話していたという思い出話からはじまり、満州の話や、広島に原爆が投下されたまさに其の日、其の時刻に広島の宇品港に停泊していた上陸用艇の缶室に下りる瞬間に青白い炎を見たということ、市内の太田川に行き惨状を見たということなど、父、吉次郎氏の体験談をあれこれ話してくださった。さらに、父は昭和二十三年から小学校教員に復職し

信濃教育界のために懸命に働いた、とも仰った。これはまさに日記の記事と何ら齟齬するところではなかったのである。自分史を千部ほど作って友人・知人に配布したことがあったが、在庫があれば送るとも仰っていただいた。このまったく予想だにしなかった展開に稿者の内に高揚してくる思いは抑えがたく、ただただその波に身を任せるのみであったことを告白しておこう。もちろん西澤、志摩両氏にとっても、遠く離れた地の全くの無縁の人物から父親の日記の存在を突然知らされ、あまりさえ若かりし父の生の姿をとどめている日記の内容を告げられさぞや驚かれたことだろう。稿者の非礼は重々お詫びしたい。ただ電話の向こうからも昂ぶってくる空気が感じられたことは事実であった。

五　『自分史　母の雪袴』より

諏訪部吉次郎氏の生前に刊行された自分史がご長男である西澤省悟氏から手紙と共に、日ならずして稿者のもとに届けられた。手紙には、「教師は聖職である」との信念を貫いた父、戦争責任を負いつつ平和教育に徹した父をこのような形でよくぞ探し出していただいたとの丁重な謝辞が記され、直後に弟、志摩氏からも、吉次郎氏の経歴と人となりについて詳しく認めた手紙が届けられ、その末尾に「今回のこと、父も母も大変喜んでいるものと思います。殊に六年前に他界した母が知ればどれほど喜んだかとも思います。深く感謝申し上げます」と述べられていた。両者の真情が綴られた文面を読みつつこみ上げてくる感動と共に、この父にしてこの子たちがあったのだとも深く思ったものである。

『自分史　母の雪袴』（以下、『自分史』と略称）は平成元年（一九八九）九月、吉次郎氏の古稀の祝意をもこめて自費出版されている。本書の書名は、一家の家計を助け、雪袴姿で農事にあたった母へ「恩に答えられるような生き方ができたかどうかをまとめてみたいと思いついた」（「序」）ことによっていると言う。また、同時に自分のことを「子供達の為に書いておく必要を感ずる」（「序」）とも述べている。本書は自分史との書名を冠するものの、誕生から昭和二十年（一九四五）の終戦の時点までのことが綴られ、巻頭には家族や自身の幼児の時と中尉の時（昭和二十年）の写真が掲げられ、さらには巻末に家系図や古稀までの簡略な年譜が付されていて、吉次郎氏の人物像を知る大きな手掛かりになる。『自分史』は、「俺は」を主語とする雄渾で克明な記述に満ちていて、もちろん何らかの依るべき資料があったのだろうが、一気呵成に書きあげられたような気配すら漂う文体に終始している。

それでは日々に記された記述と後年に「俺は」で書かれたそれとはどう関わっているのであろうかということに言及しておきたい。

本書の第三章に相当する題目は「馬車馬の如き青春」。その中の「二年生になって」と「満州国建設勤労奉仕隊参加」、「目的地

太古洞入り」から「勤労奉仕終了帰省の途につく」、「紀元二千六百年歌斉唱隊参加」の各項目が右にあげた日記の記事に相当する。しかし日々の簡略な記事を連ねている日記とは大きく異なり、明らかに読者を意識した記述に意を払っているようである。その例をあげておこう。六月九日、ハルピンであった青年のことについて日記では次のように断片的だがかなり詳しく記している。

（少年は）時々自分を見る。又、自分も彼の顔を時々ぬすみ見る。たまらなくなってこちらから話かけてみたところ、奉天第五国民学校の四年生だと云ふ。それから色々風俗上の事や民情等を話す。良く日本語が出来る。キャラメルをやって共に名を告げて全く親しくなる。彼の名は胡俊品と云ふ。話して居る内に同校の連中もがや〳〵寄って来て満語等を教る。夜も共に休む。併し彼は木蘭で降り、木蘭は午前一時頃に着。家では明日は（ナシ）の節であると大変嬉しさうであった。

これに対して『自分史』では次のような記述になっている。

甲板には我々が見なれた服装の学生が一人いて話しかけると日本語がなから話せるハルピンの中学生であって、六月六日の節句休みで故郷へ帰るところとか、日本語が良くできる事が出世できる第一条件との事だった、お節句のご馳走は肉饅頭だから船から下りて家へ寄らないかといった。

この学生と話している中に甲板上は暮色がこめて寒くなり、仕方なく船室に下りて現地人との間に割り込んだ、入ってしまえばどうと言う事もなく臭いのも気にならなくなった、

（一五四・一五五頁）

同じ事実を対象としながらもその記述のありかたがかなり相違していることは明確で、『自分史』の記述に読ませようとする配慮が濃厚である。あるいは七月六日の事態について見てみよう。『自分史』では「福沢君の病気帰省」とある箇所である。

七月の中旬か我々同級生の福沢君が病気になり、ここでは治せないという事で故郷へ帰らせる事になった、誰か付いて行かなければならない、誰に行ってもらうか君達で決めろと先生から言われた。考えてみれば俺達には無理だとなぜ言えなかったか、その為に医者もおりその助師もいたのに、その時は先生から言われた通りに当然と思っていた、俺たちは食堂で誰に行ってもらうか決めるに困った、誰だって不案内な遠い異国の旅、しかも病人を抱えての旅だ、さんざん話してもらちが行かない、その時青山君が「俺が行く」といってくれた、彼は後で俺が無理に頼んだというがそんな覚えはない。

（一五九頁）

この事態を日記では次のように事実のみを記している。

夕食後清水先生より突然福沢君の病勢悪変し出来る限り早く内地へ返したいとの事、それについて誰か付きそひの者一名なければならぬとの事、誰が行くとも定まらず、遂に青山君が率先行って来れることになり直ちに支度をなしチャムス迄清水先生も送るとて午後十時過ぎに団の警備員と共に清河鎮へと出かける。明朝五時に出発すると。

『自分史』には往時の心情を織り交ぜつつ回顧し、その時の事態をより立体的に記述しようとする工夫が垣間見られる。このような類例はいくつも見出せるようで、仮にこのような比較対照を連ねたとしたならば、日記と物語というカテゴリーを考える一つの材料にはなるのではないかとも思うのである。

日記に唯一、絵の記入があった八月二十五日は帰国の途に着いた時であって、心は日本へ向かっていたはずであろう。『自分史』には新京での満州料理の素晴らしさや満鮮国境での荷物検査での出来事について触れた後、「朝鮮に入ると藁葺きの小さな家が密集した集落が目につき、真赤ななんばんをどこの家でも乾してあった、南にさがるに従い山は、はげ山が多く田んぼの稲はすっかり穂が出そろっていた」（一六四頁）と記している。まさにその時、吉次郎の目に焼きついた光景がペンを走らせる力になっていたのではないかと思われる。当日は午前十一時に図門（豆満江）に到着し、午後三時五十分に羅津着であることから、夏の朝の張鼓峰の光景であったのである。峰の向こうに日本を見ていたのであろう。

おわりに

日本文学講読の授業で更級日記をとりあげたのを機に、あらためて日記とは何かを考えながら読み進めている。平安時代の、とりわけ女性の書いた日記類と本書とが大きく異なっていることは当然ではあるが、本書に映し出された記録性、自照性には更級日記と相通いあうものがあるのではないかと思われる。人生を、時代を真摯に受け止め思念を書きとどめる行為を、後人が丹念に読み解くこともまた大切なことであろう。

『自分史』の最後の項「お国の為とはなんだったのか」の一部を引用して結びとしたい。

お国の為とは、お国をだめにすることだった、ではこれからの国民教育の目標は何か、一握りの者の大権による教育がいかに危険であるかを、国民はよくよく骨身にしみてわかった、戦争はこりごりだ。戦争のない国造りこそ大切なのだが、俺としては今後どうしたらいいのだろう、と考える。

（二二三頁）

（付記）

本稿の礎稿をご覧になった志摩晴樹氏からの書簡に、「二十一歳の等身大の父がそこにいるような深い感慨を覚えました」との感想と共に、次のような記事があった。「青年学校教員養成所は現在の長野吉田高校の校地内にあり、奇しくも、昭和五十三年に私が長野県教員に採用され、先ず着任したのがまさに長野吉田高校だったのです。その時、父はある種の感慨を覚えたようでありまして、着任後直ぐに、私に黙って吉田高校を訪れ、あたりを見学し、しばらく思い出に浸ったようでした。それほど養成所のことは懐かしい思い出であって、確かに私が子どもの頃もその思い出をよく話してくれたように覚えています」（十一月四日付）

（なかにし・けんじ　本学教授）